

The 8th Research Forum of Physical Education and Sport for Higher Education, 2020

第8回大学体育スポーツ研究フォーラム

会期：2020年2月27日(木)，28日(金)

会場：新潟医療福祉大学



第 8 回大学体育スポーツ研究フォーラム

目 次

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
主催，期日，会場，実施内容・・・・・・・・	2
フォーラム組織・・・・・・・・・・・・・・・・	3
大体連常務理事／研究部長，実行委員長挨拶・・・・・・・・	4
フォーラム日程・・・・・・・・・・・・・・・・	5
会場への交通案内・・・・・・・・・・・・・・・・	7
会場案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
参加者へのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・	10
発表者へのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・	11
発表プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・	12
発表抄録（事例報告，研究報告）・・・・・・・・	14
基調講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	23
大学体育授業事例ワークショップ・・・・・・・・	26
「大学体育スポーツ学研究」投稿規定・・・・・・・・	29

主催，期日，会場，実施内容

【主 催】

公益社団法人全国大学体育連合

【期 日】

2020 年 2 月 27 日（木），28 日（金）

【会 場】

新潟医療福祉大学

（〒950-3198 新潟県新潟市北区島見町 1398 番地）

【実施内容】

基調講演，大学体育授業事例ワークショップ，大学体育スポーツに関する研究報告・事例報告

フォーラム組織

【運営委員会組織】

全国大学体育連合常務理事／研究部長 木内敦詞（筑波大学体育系）

運 営 委 員

田原亮二（西南学院大学），西田順一（近畿大学），難波秀行（日本大学），

中山正剛（別府大学短期大学部），佐藤和（千葉工業大学）

【実行委員会組織】

実 行 委 員 長 佐藤敏郎（新潟医療福祉大学）

実 行 委 員 次 長 市川浩，武田丈太郎（新潟医療福祉大学）

実 行 委 員

西原康行，下門洋文，高田大輔（新潟医療福祉大学）

大体連常務理事／研究部長，実行委員長挨拶

全国大学体育連合常務理事／研究部長 木内敦詞（筑波大学・教授）

このたび，実行委員長の佐藤敏郎先生をはじめ，新潟医療福祉大学の先生方にご尽力いただき，第 8 回目のフォーラムを開催できますことを，心より嬉しく思います。大体連は昨年，日本学術会議協力学術研究団体に認定後，日本スポーツ体育健康科学学術連合へ加盟しました。これらの動きは，大体連が FD 研修とともに学術研究を推進していこうとする意思の宣言でもあります。本フォーラムと論文誌（大学体育スポーツ学研究）が大学体育教員の FD を支える学術活動の両輪として機能し，全国の大学の体育授業や運動部活動の優れた実践に繋がることを願っています。



第 8 回大学体育スポーツ研究フォーラム実行委員長

佐藤 敏郎（新潟医療福祉大学・教授）

第 8 回の大学体育スポーツ研究フォーラムの実行委員長を仰せつかり，新潟医療福祉大学にて開催させていただきますことを大変光栄に存じております。

現代の大学生にとって，大学体育の授業を通してスポーツの意義，健康づくりの重要性を理解して身体活動を実践することは，大学生活を有意義に過ごすための一助となるだけでなく，卒業後の人生を豊かにし，健康で活力ある家庭や社会を築く上でも欠かすことのできない重要なことと思われます。



今回のフォーラムでは，研究報告，事例報告の他に，講演は「教育工学と大学体育教員の力量形成」，ワークショップでは，本学の教養体育授業から「医療福祉系大学教養体育の実践事例」，「車いすバスケットボール体験」を行います。ぜひ多数の皆様にご参加いただき，本フォーラムの内容を通して，情報交換と交流の場，最新の研究報告，事例報告のご発表，ご聴講いただければ幸いに存じます。どうぞよろしくお願い致します。

フォーラム日程

期 日：2020 年 2 月 27 日（木），28 日（金）

会 場：新潟医療福祉大学（〒950-3198 新潟県新潟市北区島見町 1398 番地）

2 月 27 日（木）

時 間	プログラム	場 所
12:00～	受付	Q202 教室前
13:00～	開会式・挨拶	Q202 教室
13:05～17:32	16 演題 4 セッション 発表：1 演題 15 分（発表 10 分質疑応答 5 分）	
13:05～14:08	①事例 1-4 座長：佐藤 和（千葉工業大学）	Q202 教室
14:13～15:16	②事例 5-8 座長：田原 亮二（西南学院大学）	Q202 教室
15:21～16:24	③事例 9，研究 1-3 座長：難波 秀行（日本大学）	Q202 教室
16:29～17:32	④研究 4-7 座長：中山 正剛（別府大学短期大学部）	Q202 教室
19:00～	情報交換会 場 所：魚沼釜蔵新潟店（新潟市中央区花園 1-96-47） http://www.sep-i.co.jp/niigata/ 参加費：5,000 円	新潟駅南口すぐ，ホテルメッツ 1 階

2 月 28 日（金）

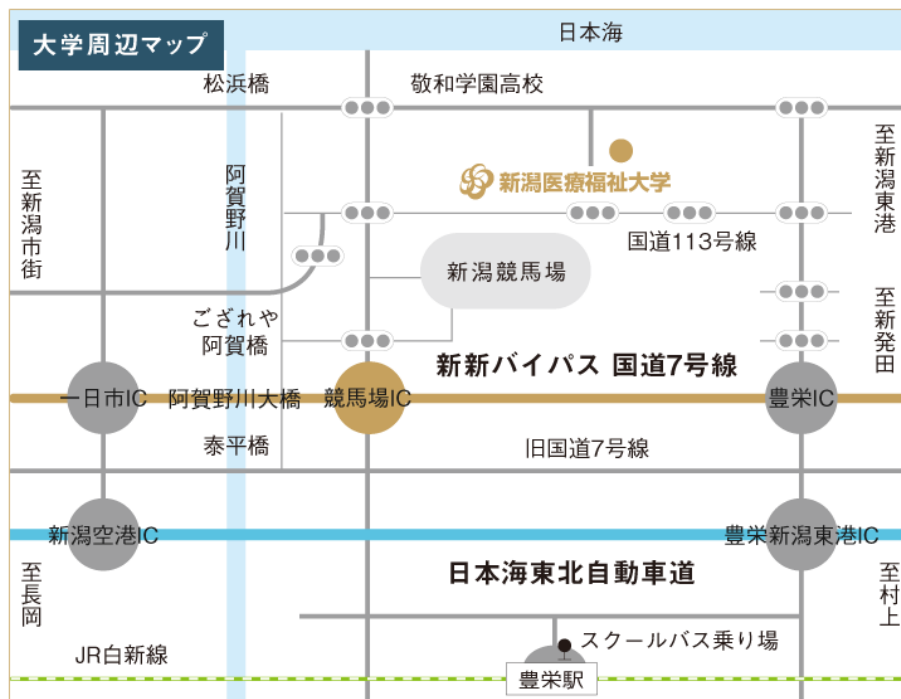
時 間	プログラム	場 所
9:00～	受付 ※前日に受付をお済みでない方のみ，受付へお越しください。	Q202 教室前
10:00～12:00	基調講演（講演とアクティブラーニング） 西原 康行 氏（新潟医療福祉大学） 「教育工学と大学体育教員の力量形成」	Q202 教室
12:00～12:10	フォーラム優秀発表賞の発表	Q202 教室
12:10～13:10	昼休憩	
13:10～13:55	大学体育授業事例ワークショップ1 「医療福祉系大学教養体育の実践事例」 《話題提供者》佐藤敏郎（新潟医療福祉大学）	Q202 教室
14:00～15:00	大学体育授業事例ワークショップ2 「車いすバスケットボール体験」 《コーディネーター》市川浩／武田丈太郎（新潟医療福祉大学） ※体育館シューズ及び可能であればジャージ持参	H 棟第 1 体育館
15:00	終了予定（式はございません）	Q202 教室

会場への交通案内

【新潟医療福祉大学へのアクセス】

1) お車をご利用の場合

国道7号線（新新バイパス）「競馬場 IC」から新潟競馬場方面へ北進。県道398号線との交差点を右折後、約1.5km 先右手。



2) 電車をご利用の場合

JR 新潟駅より、JR 白新線「豊栄（とよさか）」駅下車。豊栄駅よりスクールバスにて約 20 分。

★『スクールバス運行予定 休日運行時刻表』と合わせてご確認ください。

NUHW2019

平 常

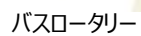
スクールバス・路線バス時刻表 ★2019. 7. 1以降

豊栄駅・木崎地区便 [スクールバス] (平日のみ)											
大 学 行						大 学 発					
発車場所	駅発車時刻	経由	木崎発車時刻	到着場所	到着時刻	発車場所	発車時刻	経由	木崎発車時刻	到着場所	到着時刻
◎豊栄駅北口	7:10	木崎地区		大 学	7:31	大 学	10:40	木崎地区	10:50	豊栄駅北口	11:00
豊栄駅北口	7:45	—	—	大 学	8:00	◎大 学	11:00	木崎地区		豊栄駅北口	11:22
豊栄駅北口	8:00	—	—	大 学	8:20	大 学	11:15	木崎地区	11:25	豊栄駅北口	11:35
		木崎地区	◆8:10	大 学	8:20	大 学	12:20	木崎地区	12:30	豊栄駅北口	12:40
豊栄駅北口	8:30	木崎地区	8:40	大 学	8:50	大 学	13:20	木崎地区	13:30	豊栄駅北口	13:40
		—	—	大 学	8:45	大 学	14:08	木崎地区	14:18	豊栄駅北口	14:28
豊栄駅北口	◆9:40	—	—	大 学	9:55	大 学	14:48	木崎地区	14:58	豊栄駅北口	15:08
豊栄駅北口	10:12	木崎地区	10:22	大 学	10:32	大 学	15:35	木崎地区	15:45	豊栄駅北口	15:55
豊栄駅北口	11:00	—	—	大 学	11:15	大 学	★15:40	—	—	リハ病院前	15:55
◎豊栄駅北口	11:30	木崎地区		大 学	11:51	大 学	16:35	木崎地区	16:45	豊栄駅北口	16:55
豊栄駅北口	11:35	木崎地区	11:45	大 学	11:55	大 学	17:20	木崎地区	17:30	豊栄駅北口	17:40
豊栄駅北口	12:43	木崎地区	12:53	大 学	13:03	◎大 学	17:35	木崎地区		豊栄駅北口	17:59
豊栄駅北口	13:48	木崎地区	13:58	大 学	14:08	大 学	18:15	木崎地区	18:25	豊栄駅北口	18:35
豊栄駅北口	14:28	木崎地区	14:38	大 学	14:48	大 学	19:00	木崎地区	19:10	豊栄駅北口	19:20
豊栄駅北口	15:15	木崎地区	15:25	大 学	15:35	大 学	★19:00	リハ病院	19:15	豊栄駅北口	19:30
◎豊栄駅北口	15:35	木崎地区		大 学	15:56	大 学	19:50	木崎地区	20:00	豊栄駅北口	20:10
豊栄駅北口	16:11	木崎地区	16:21	大 学	16:31	大 学	20:40	木崎地区	20:50	豊栄駅北口	21:00
豊栄駅北口	16:55	木崎地区	17:05	大 学	17:15	大 学	21:30	木崎地区	21:40	豊栄駅北口	21:50
豊栄駅北口	17:55	—	—	大 学	18:10	大 学	22:15	木崎地区	22:25	豊栄駅北口	22:35
◎豊栄駅北口	18:07	木崎地区		大 学	18:30	※『★』印は月曜平常授業日のみ運行 / 『◎』は路線バス運行 ※『◆』印 8:10木崎発/9:40豊栄駅発便は、マイクロバス運行となります。定員に限りがございますので、乗車できなかった場合は、次の豊栄駅発便をご利用ください。 ※ 木崎発車時刻については概ねの時間となります。交通状況により、2～3分程度前後する可能性があることを予めご理解下さい。					
豊栄駅北口	18:40	—	—	大 学	18:55						
豊栄駅北口	19:25	—	—	大 学	19:40						
豊栄駅北口	20:15	—	—	N-Village伍桃	20:35						
豊栄駅北口	21:05	—	—	N-Village伍桃	21:25						
豊栄駅北口	21:50	—	—	N-Village伍桃	22:10						
豊栄駅北口	22:45	—	—	N-Village伍桃	23:05						
豊栄駅北口	23:45	—	—	N-Village伍桃	0:05						

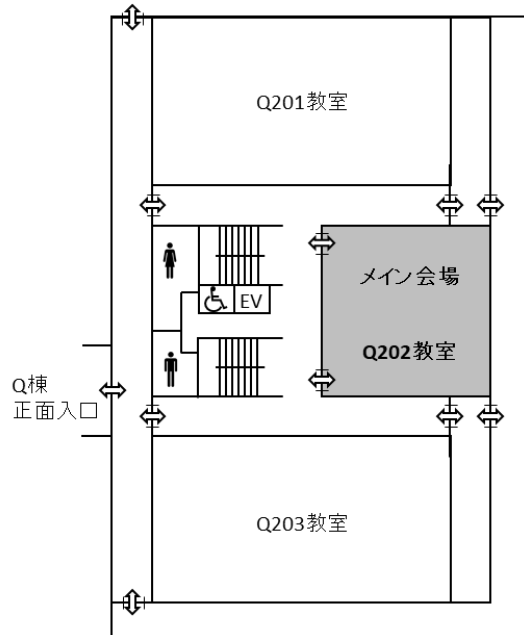
3) 路線バスをご利用の場合

新潟駅万代口バスターミナル 9 番乗り場から、空港・松浜線「新潟医療福祉大学行き」に乗車、「新潟医療福祉大学」にて下車。または「太郎代浜行き」に乗車、「新潟医療福祉大学入口」にて下車。

【新潟医療福祉大学キャンパス案内図】



- 本フォーラムの主要プログラムは、Q棟（第2講義棟）202教室で行います。
- 2日目大学体育授業事例ワークショップ2「車いすバスケットボール体験」はH棟第1体育館で行います。



【Q棟2階（地上階）概略図】

参加者へのお知らせ

1. 受付

受付は、Q 棟 202 教室前に設けます。受付時にお渡しするネームカードへ氏名・所属をご記入の上、期間中は会場にて必ず着用してください。

2. 参加費

参加費は以下のようになっております。

会員校専任教職員および個人会員：3,000 円（1/31 までの振込；2,000 円）

非 会 員：4,000 円（1/31 までの振込；3,000 円）

大学院生：2,000 円（1/31 までの振込；1,000 円）

【重要な変更点】

①事前提出抄録は 500 文字以内の簡易版に

2019.2 開催の第 7 回フォーラムより、事前提出抄録は 500 文字以内の簡易版としていきます。フォーラム終了後の 3 月 5 日（木）までに、A4 版 1 頁のフル抄録（3 月発行の「大学体育スポーツ学研究」掲載用）を提出いただきます。詳しくは、大学体育スポーツ学研究第 16 号の「フォーラム報告」をご覧ください。

②一般発表者のうち、参加費納入義務は筆頭発表者のみに

2020.2 開催の今回の第 8 回フォーラムより、一般発表者のうち参加費納入義務は筆頭発表者のみとします。よって、フォーラムに参加されない第二発表者以降の方の参加費納入は不要です。

発表者へのお知らせ

研究報告・事例報告

1. 1 演題につき、発表 10 分、質疑応答 5 分の計 15 分間です。8 分、10 分、15 分に合図をします。持ち時間の厳守をお願いいたします。
2. プログラム・抄録集とは別に資料を配布される方は 50 部程度 ご用意ください。
3. 接続するノートパソコン（レーザーポインタ含む）は、原則として各自ご持参していただく ことになっておりますので、ご注意ください。
Mac のパソコンで正常に投影されない場合は、当方用意の Windows PC で発表いただきますので、Mac ユーザーの方は、パワーポイントファイルを USB メモリに入れてご持参ください。
4. プロジェクターへの接続は VGA 端子と HDMI 端子となっております。変換アダプタが必要な場合は各自でご用意ください。
5. 次演者は指定の場所に着席してください。
6. 発表に関して不明な点は、お気軽にお問い合わせください。お問い合わせ先は、プログラム抄録集担当の 中山正剛（8th.forum.2020@gmail.com） まで。

発表プログラム

【日程】 2月27日（水）13：05～17：32

【会場】 Q棟202教室

【内容】 4セッション16演題：研究報告7演題，事例報告9演題

第1セッション：座長 佐藤 和（千葉工業大学）

事例-1	13:05～13:20	社会情勢に合わせたインターンシップの授業設計 -新潟医療福祉大学健康スポーツ学科の取り組み-
	○武田 丈太郎, 山本 悦史(新潟医療福祉大学)	
事例-2	13:21～13:36	体育スポーツ系学科におけるインターンシップの授業設計とその効果 -新潟医療福祉大学健康スポーツ学科の事例報告-
	○山本 悦史, 武田 丈太郎(新潟医療福祉大学)	
事例-3	13:37～13:52	大学スキー実習での経営学的観点による課題設定の成果 -スポーツ経営学専攻学生の課題に対する気づきの分析-
	○古田 康生, 原田 理人(岐阜協立大学)	
事例-4	13:53～14:08	選択科目としての教養体育授業を受講する学生の特徴
	○篠原 康男, 上田 憲嗣(立命館大学)	

第2セッション：座長 田原 亮二（西南学院大学）

事例-5	14:13～14:28	授業内における体組成測定の結果
	○藤林 真美(摂南大学)	
事例-6	14:29～14:44	ADDIEモデルを用いた大学体育授業の再設計
	○藤野和樹(千葉商科大学), 木内敦詞(筑波大学)	
事例-7	14:45～15:00	LMSを活用した保健体育講義における教材の開発
	○中澤 謙(会津大学)	
事例-8	15:01～15:16	大学体育授業における教授行動分析を用いた実践的振り返り
	○片岡 悠妃(青山学院大学), 田村 達也, 岡室 憲明, 安井 年文, 鈴木 淳平(駒沢大学), 村上 秀明(桐蔭横浜大学)	

第3セッション:座長 難波 秀行(日本大学)

事例-9	15:21～15:36	動作測定に主眼をおいた大学体育授業の試み
	○市川 浩, 越中 敬一, 高田 大輔, 武田 丈太郎, 佐藤 敏郎(新潟医療福祉大学)	
研究-1	15:37～15:52	大学体育授業におけるGPSを活用した運動負荷の検討
	○田村 達也, 片岡 悠妃, 長尾 茉珠, 岡室 憲明, 宮崎 純一(青山学院大学), 今川 正浩(東海大学)	
研究-2	15:53～16:08	女子大学生における体力水準, 学業成績, 形態と生活状況との関係
	○佐藤 敏郎, 市川 浩, 武田 丈太郎, 下門 洋文, 鶴瀬 亮一, 高田 大輔(新潟医療福祉大学)	
研究-3	16:09～16:24	野外運動を教材とした大学体育授業によるSelf-authorshipの育成
	○佐藤 冬果, 大友 あかね, 小宮山 咲希, 坂本 昭裕(筑波大学)	

第4セッション:座長 中山 正剛(別府大学短期大学部)

研究-4	16:29～16:44	協同型学習における社会人基礎力の変化と受講者のパーソナリティ
	○佐藤 和, 引原 有輝, 金田 晃一(千葉工業大学)	
研究-5	16:45～17:00	スポーツ経験とポジティブ徳性の関係に迫る -改訂版ポジティブ徳性尺度による検討-
	○霜島 駿太(筑波大学大学院), 木内 敦詞(筑波大学), 西田 順一(近畿大学)	
研究-6	17:01～17:16	在学中の体育・スポーツに関する大学生・短大卒業生の経験と意識 -1970年から2014年の卒業生1,800人を対象とした調査より-
	○小林 勝法(文教大学), 北 徹朗(武蔵野美術大学)	
研究-7	17:17～17:32	大学における体育授業研究の動向と今後の課題 -論文誌「大学体育スポーツ学研究(第17号まで)」のレビューに基づいて-
	○西田 順一(近畿大学)	

発表抄録（事例報告，研究報告）

2月27日（木）13:05～17:32

事例報告9演題，研究報告7演題 計16演題 4セッション

第1セッション4演題（13:05～14:08）

事例報告1-4 座長：佐藤 和（千葉工業大学）

第2セッション4演題（14:13～15:16）

事例報告5-8 座長：田原 亮二（西南学院大学）

第3セッション4演題（15:21～16:24）

事例報告9，研究報告1-3 座長：難波 秀行（日本大学）

第4セッション4演題（16:29～17:32）

研究報告4-7 座長：中山 正剛（別府大学短期大学部）

事例報告 1

社会情勢に合わせたインターンシップの授業設計

新潟医療福祉大学健康スポーツ学科の取り組み

○武田丈太郎，山本悦史（新潟医療福祉大学）

平成9年，文部省，通商産業省及び労働省（いずれも当時）は，インターンシップに関する共通した基本的認識や今後の推進方策の在り方を示す「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」を取りまとめた。これを契機として，インターンシップは，大学生が自らの専門分野や将来のキャリアに関連した就業体験を行う機会として認知され，現在では多くの大学に普及している。また，大学においては，自主性や独創性のある人材の育成に繋げることができる点，学生においては，実社会の企業と接点を持つことで就業意識を高めることができる点，企業等においては，実践的な人材の育成を図るとともに大学及び学生の理解を高める機会にできる点が，特長として挙げられる。これらの特長を伸ばすため，文部科学省は，インターンシップに関連する様々な事業を展開しており，各大学においても，インターンシップに関わる授業や各種制度を変化させている。本発表では，新潟医療福祉大学健康スポーツ学科を事例として，インターンシップに関する授業内容及びカリキュラムにおける位置づけが，国，企業及び経済団体等の取組みに合わせて，どのように変化してきたかを中心に報告する。

事例報告 2

体育スポーツ系学科におけるインターンシップの授業設計とその効果

新潟医療福祉大学健康スポーツ学科の事例報告

○山本悦史，武田丈太郎（新潟医療福祉大学）

自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を意味するインターンシップは，いまや大学教育の基本パーツとして位置づけられ，その対象や内容に関しても多様な展開が確認できるようになっている（吉田，2016）。また，大学教育と学生の就業体験がこれまで以上に密接に結び付きつつある今日の状況は，体育スポーツ系の大学・学部・学科においても決して無関係ではなく，今後もインターンシップに関連する科目の存在意義や具体的な授業設計の検討，そしてこれらの効果に関する検証の継続的な実施が求められるようになることも予想される。本報告の事例として取り上げる新潟医療福祉大学健康スポーツ学科では，昨今の急速な経済状況の変化やスポーツ産業全体の構造転換に対応すべく，学科の専門科目である「インターンシップ実習」という授業において，①実習期間に応じたポイント制の導入，②自己開拓による実習の義務化という2つの変更を加えることとした。ここでは2016年に採用された新たな授業設計に基づく取り組みが，学生の履修状況や学科内のキャリア支援体制にどのような変化をもたらしたのかという点に注目しながら，その効果と課題について報告を行う。

事例報告 3

大学スキー実習での経営学的観点による課題設定の成果

スポーツ経営学専攻学生の課題に対する気づき分析

○古田康生，原田理人（岐阜協立大学）

【緒言】2019年2月に実施されたA大学経営学部スポーツ経営学科スキー実習では、技能習得に加えて経営学的観点による課題（以下、課題）がスキー実習班ごとに課された。それは、ウィンタースポーツ人口の増加策、集客、インバウンド、スキー人口増加策の4点である。本研究では、学生の気づきを分析し、今後の課題設定法を検討することを目的とした。【研究方法】35名（女子学生2名）の参加学生は、5つに分けられ班ごとに実習をした（3泊4日）。実習初日に課題が課され、3日目夜に班ごとに発表させ、分析対象とした。【結果・考察】発表された内容は、概ね設定課題に回答していると考えられる。ただし、多くがこれまでに実施された内容（SNSの活用、割引、食事、ファッション性、メディアの活用など）であり、掘り下げた内容は少数であった。外国人客への対応（英語表示や外国人スタッフ）は、学生が実際にゲレンデで観察したことで気づけた内容であり一つの成果である。今後は、経営学を学ぶ若者の考えを引き出すために中間（2日目）にアイディアを報告させ、さらに各班でアイディアを掘り下げた検討ができるよう助言する機会が必要と考えられる。

事例報告 4

選択科目としての教養体育授業を受講する学生の特徴

○篠原康男，上田憲嗣（立命館大学）

大学設置基準の大綱化以降、教養体育の開講や必修の有無は各大学に委ねられており、開講される場合は各大学の教育理念や教育目標に沿って実施されている。教養体育の選択化については、中山ほか（2011）によると、運動実施の二極化を助長させる可能性があることが報告されている。また、徳永（2006）によると、教養体育授業を受講して得られた学びとして、必修科目では「人間関係」を、選択科目では「体力向上」を特に挙げていることが報告されている。本学では、「スポーツ・健康科目」として講義科目と実習科目がそれぞれ選択科目として開講されているが、実習科目の受講生に関する特徴や受講実態については、これまでほとんど調査されていなかった。そこで本研究では、選択科目としての教養体育授業を受講する学生の特徴について、アンケート調査を通じて検討した。その結果、授業を通じて高めることができた力として、「心身の健康」が最も多く、次いで「異なる価値観への理解」や「総合的な視点」が挙げられていた。受講動機については、「科目内容」が最も多かったものの、「時間割の都合」や「登録上限のための1単位として」という回答も多くみられた。

事例報告 5

授業内における体組成測定の結果

○藤林真美（摂南大学）

本学のスポーツ実技科目（スポーツ科学）では、開講後すぐに体力測定を行なっている。測定終了後、全国平均値を元に自分の結果を偏差値として算出、現在の体力レベルの認知と今後の身体・スポーツ活動へ向けた課題とさせている。今回、体力測定に加え体組成を測定した結果、興味深い行動変容が見られたので報告する。本学看護学部では、スポーツ科学を必修科目として開講している。体力・体組成の結果集計時に、体組成と運動・スポーツによる変化およびその意味の解説、さらに事後学習を課して理解を深めさせた。一方で本学は、今年度学内のスポーツ施設を使用できず、徒歩で片道15分の場所にある提携校のスポーツ施設を借りて授業を行った。過去にも同じ場所で授業を実施したことがあったが、その時は学生が、異口同音に「遠い」「面倒だ」と言っていたが、今回は「往復の歩行により歩数が増える」「良いトレーニングになる」といったポジティブな感想しか聞かれなかった。また授業最終回の振り返りレポートには、体組成を考慮した上での日ごろの身体活動・スポーツの必要性について記載した学生が多数見られた。体組成測定により、自分の身体を客観的に捉え、改善に向けた行動を促進できる可能性が示唆された。

事例報告 6

ADDIE モデルを用いた大学体育授業の再設計

○藤野和樹（千葉商科大学），木内敦詞（筑波大学）

本報告では、授業改善サイクルで用いられる ADDIE モデル（ガニェら，2007）を用いて、大学体育授業の再設計を行なった事例について紹介する。まず分析（Analysis）では、大学のディプロマポリシーを理解し、担当科目がカリキュラム編成方針上どのような位置づけにあるのかを確認した。次に設計（Design）として、分析に基づいた学習目標や評価方法を明確にし、シラバスの再設計を行なった。さらに開発（Development）段階では、シラバスの再設計にともない、学生が学習目標を達成するために必要な教材として、身につける能力について記述させる、ワークブックを作成した。そのワークブックを用いた授業を実施（Implementation）し、授業展開やワークブックが、学習目標達成に適したものであったかを評価（Evaluation）した。評価の結果、ワークブックを活用することにより、学生の能動的な活動を促進することができた。また技能レベルによって、ワークブックの記述内容が異なることが明らかとなり、今後の授業改善において有益な情報を得ることができた。このことから、ADDIE モデルを用いた大学体育授業の再設計は、学習効果を高めるために有用であることが示唆された。

事例報告 7

LMS を活用した保健体育講義における教材の開発

○中澤 謙（会津大学）

オンライン学習管理システム（Learning Management System, 以下 LMS）は、講義に関する内容をオンライン化して一元管理できるシステムである。LMS を教授活動に導入するねらいは、学習者が自身の知識の獲得や活用状況をモニターできる環境を、教授者が操作提供することで、学習者が効果的に学ぶ支援をするところにある。本実践では、一般教養科目である保健体育理論の講義に LMS を導入し、学習者である学生に対して学習素材を効果的に提示する方法を検討した。保健体育理論の講義は 3 つの単元で構成され、評価は単元毎に到達度テスト及びレポートによる。到達度テスト結果と提出されたレポートの内容から、講義で得た知識と主張との結びつきに課題があることが分かった。そこで、LMS 上に提示する内容について、1) 無関係な処理を減らす、2) 本質的な学習を促進する、3) 生成的処理を促進すること、の 3 つの観点から整理し、小テストを提示するタイミングとレポート課題における問いの設定を見直した。LMS 上で提示する教材の見直しにより、授業外での復習の促進と、レポート記述における主張と論拠の明示化による学習の深まりが確認された。

事例報告 8

大学体育授業における教授行動分析を用いた実践的振り返り

○片岡悠妃（青山学院大学），田村達也，岡室憲明，安井年文，
鈴木淳平（駒沢大学），村上秀明（桐蔭横浜大学）

本研究では、複数の属性の異なる教員による大学体育授業の実践を、体育授業観察評価方法を基にして客観的に振り返り、教員の経験年数や専門種目の違い等による教師行動の特徴とライフスキルおよび運動有能感の獲得状況について事例的に検討することを目的とした。対象教員は、バレーボールを専門種目とする熟練教師 1 名と新任教員 1 名、バレーボールを専門種目としない熟練教員 1 名と新任教員 1 名の 4 名とした。分析対象授業は、バレーボールを実施した 5 回全ての授業（合計 20 授業）とし、分析方法については、撮影した映像データを基に期間記録法および教師行動観察法（高橋ほか、1991）に基づいて分析した。また、ライフスキルおよび運動有能感の獲得状況については、授業前後においてアンケート調査を実施した。その結果、バレーボールを専門とする教員 2 名の授業前後において、運動有能感の項目が有意に向上した。また、ライフスキルの項目については、全ての授業において有意な向上が認められなかった。さらに、4 名の教員における教授行動については、主にフィードバックの項目において異なる特徴があることが確認された。詳細は、当日ポスターにて発表する予定である。

事例報告 9

動作測定に主眼をおいた大学体育授業の試み

○市川浩，越中敬一，高田大輔，武田丈太郎，佐藤敏郎（新潟医療福祉大学）

近年、ジョギングの速度や走行距離データをスマートフォンで記録するなど、身体運動情報を得ることが容易になり、身近なものとなってきている。本学では教養体育選択科目において、身体動作測定を体験し、その有効な利用方法を理解することを目的とした実技授業を行っている。授業ではバランス能力・反応速度・着地緩衝能・ジャンプ能力・野球のバッティング・テニス・ゴルフ・サッカー・投てきなど、毎回異なるテーマを扱い、90分1回で完結する。測定はフォースプレートや慣性センサなどを使用し、床反力や加速度、角速度から算出した結果を、受講生が動作を行った直後に伝え、これを繰り返している。1人ずつ順番に測定するために待ち時間が生じるという課題はあるものの、その待ち時間中に受講生個々が動作を試行錯誤したり他者との比較をしたりといった様子が観察できている。運動技能獲得を目指した身体動作情報のフィードバックでは、運動者の情報を獲得するだけでなく、理想や目標となる動作と比較し修正の材料とすることが重要となる。今後、受講者個々が目標値設定をできるようにすることで、自律的な運動プログラム提供の一助となることを目指したい。

研究報告 1

大学体育授業における GPS を活用した運動負荷の検討

○田村達也，片岡悠妃，長尾茉珠，岡室憲明，宮崎純一（青山学院大学），今川正浩（東海大学）

近年、積極的に情報通信技術を取り入れて定量的な数値データに基づき、スポーツを解析する傾向が強まっている。特に、スポーツ中の運動量を簡便かつ正確に記録するシステムとして、GPS の活用が挙げられる。本研究では、青山学院大学の「スポーツ運動実習」（種目：サッカー）を対象に、大学体育授業における運動負荷に関する基礎資料を得ることを目的とした。被験者は男子学生 12 名とし、計 4 回の授業において測定を実施した。具体的方法としては、GPS を用いて、授業開始から終了までの学生の位置情報データを収集し、移動距離・移動スピード等のデータを算出した。その結果、1 授業あたりの平均移動距離は $5587.2 \pm 1058.1\text{m}$ であった。また、1 授業あたりの平均時間（分）は約 73 分であり、1 試合（90 分間）あたりのサッカー競技者の平均移動距離である 10km 程度と比較して、約 7 割の移動距離であった。さらに、総移動距離に対して約 11% が中強度であり、サッカー競技者の平均である約 10% と比較してほぼ同じ傾向を示した。したがって、移動距離はサッカー競技者の水準に及ばないものの、運動強度についてはサッカー競技者のレベルのものと大きな差異がないことが示唆された。

研究報告 2

女子大学生における体力水準，学業成績，形態と生活状況との関係

○佐藤敏郎，市川浩，武田丈太郎，下門洋文，鵜瀬亮一，高田大輔（新潟医療福祉大学）

本研究は，女子大学生における体力水準，学業成績，形態と生活状況との関係を明らかにすることを目的とした。対象は，2017・2018 年度に N 大学において基礎教養科目「スポーツ・健康」（1 年次必修）受講生のうち研究同意の得られた女子 853 名であった。体力水準の評価は，文部科学省の新体力テストの総合得点を用い，学業成績は各年度終了時の GPA（Grade Point Average），形態は BMI（Body Mass Index），体脂肪率を用いた。さらに，生活状況調査は，大学のポータルサイトを使用し回答を得た。分析は 6 項目の生活状況調査における体力総合得点，GPA，BMI，体脂肪率との関係を一要因分散分析を適用し，有意差が認められた場合，多重比較検定（Tukey の HSD 法）を行った。本研究の統計的有意水準は 5%とした。分析の結果，有意な主効果が認められた項目は，体力水準と「健康状態への自信」，「朝食の有無」，「読書の頻度」，「自身の社交性」，学業成績と「朝食の有無」，「1 日睡眠時間」，「家庭の経済状況」，「自身の社交性」であり，形態に関しては有意差が認められなかった。これらのことから，女子大学生における体力水準，学業成績は生活状況と密接に関連することが示唆された。

研究報告 3

野外運動を教材とした大学体育授業による Self-authorship の育成

○佐藤冬果，大友あかね，小宮山咲希，坂本昭裕（筑波大学）

【背景】Self-authorship(SA)は，自己や他者関係，知識などを捉える際，社会通念や他者の意見などの「外的な権威」を無批判に受け容れるのではなく，自らの「内的な権威」に基づいた意味づけをする能力であり，米国では 21 世紀の大学教育に求められる学修成果の基盤となる能力として注目されている。【目的】本研究は，SA の育成に有効とされる構成主義的な教育アプローチに基づいて実施された大学体育授業が受講生の SA に与える影響を明らかにすることを目的とした。【方法】野外運動を教材とした大学体育授業（全 10 週）の受講生（M=20.0 歳，N=61）を対象に，授業初回(Pre)，最終回(Post1)，授業終了後 3 か月後(Post2)に SA 評価尺度(佐藤・坂本, 2020)を用いた調査を行った。授業では，小グループでの課題解決活動である A.S.E.(Action Socialization Experience)を行い，班付きの教員および学生アシスタントは構成主義に基づいた支援を行った。【結果】SA 合計点，および自己一致因子得点において Pre と Post1 の間に 5%水準で有意な得点の向上がみられた。野外運動を教材とした授業は受講生の SA を向上させ，特に自己の内的基盤の理解やそれに基づく行動の促進に効果的であることが示された。

研究報告 4

協同型学習における社会人基礎力の変化と受講者のパーソナリティ

○佐藤 和，引原有輝，金田晃一（千葉工業大学）

近年、大学体育授業には、チーム基盤型学習や問題解決能力養成型学習といった協同型学習が積極的に取り入れられている。一方で、協同学習の有効性は、学習者のパーソナリティに大きく影響をうけることも指摘されている。本研究は、社会人基礎力を指標として大学体育授業における協同型学習の教育効果に着目した。特に、Pre-調査における社会人基礎力が低い学生に注目し、Post-調査での変化量の差異（停滞群 vs 向上群）と受講者のパーソナリティを関連付けて検討することを目的とした。教育効果の指標は社会人基礎力とし、パーソナリティの指標には主要 5 因子性格検査（外向性、協調性、良識性、情緒安定性、知的好奇心）を用いた。向上群が有意に高値を示した社会人基礎力要素と性格因子の主な結果は、以下の通りであった。①主体性、働きかけ力、実行力、計画力、創造力、傾聴力、規律性の外向性。②傾聴力の協調性と知的好奇心。③状況把握力の協調性、良識性、知的好奇心。④規律性の良識性と知的好奇心。これらの結果から、傾聴力、状況把握力、規律性の向上には、受講者のパーソナリティ特性を踏まえた授業方略の必要性が考えられた。

研究報告 5

スポーツ経験とポジティブ徳性の関係に迫る

—改訂版ポジティブ徳性尺度による検討—

○霜鳥駿太（筑波大学大学院），木内敦詞（筑波大学），西田順一（近畿大学）

ポジティブ心理学は、20 世紀の心理学の実践・研究の中であまり注目されてこなかった、人間のもつ心のポジティブな動きに注目するものである（島井, 2006）。ポジティブ心理学の中核に、強み研究がある（津田ほか, 2017）。強みには複数の呼び方があるが、本研究ではポジティブ徳性と呼ぶ。ポジティブ徳性は 24 の長所を 6 つの美德に整理した概念である。ポジティブ徳性を育むためにスポーツの関与は適していると考えられるが、その関係は明らかではない。ポジティブ徳性を測定する尺度として Values In Action Inventory of Strengths : VIA-IS がポジティブ心理学の先導者である Seligman と Peterson により開発された。この尺度は世界中で知られており、大竹ら（2005）は VIS-IS を翻訳した尺度の日本版生き方の原則調査票が作成されたが、信頼性・妥当性が不十分な点、翻訳した文章が日本人の感覚では理解しづらい点、が指摘されている。そこで、改訂版尺度を作成し、スポーツ経験との関係を明らかにすることを目的とした。結果の詳細については、当日の発表の際に述べる。

研究報告 6

在学中の体育・スポーツに関する大学・短大卒業生の経験と意識

1970 年から 2014 年の卒業生 1,800 人を対象とした調査より

○小林勝法（文教大学），北徹朗（武蔵野美術大学）

大学あるいは短期大学の卒業生に在学中の体育やスポーツの経験を振り返ってもらい、年代によってどのように異なるのかを明らかにすることを目的として、2018 年 11 月にインターネットによるアンケート調査を行った。卒業年は 1970 年から 2014 年とし、卒業年の 5 年刻み毎にグループ化し、各グループとも男女 100 人ずつ、合計 1,800 人から回答を得られた。体育実技の履修しなかった人は 2000 年卒より前は 11.0%以下であったが、2000 年卒以降は 19.0～26.0%と急増していた。授業外でのスポーツ活動として実施率が多いのはスキーやテニスなどで、1990 年代には 30%近くの実施率であったが、近年では実施率が減少している。大学・短大が提供するスポーツの課外プログラム（単位認定なし）で多いのは、スキー教室（10.9%）と球技大会（10.7%）であった。参加していた課外活動では、体育会運動部が 11.8%で、スポーツ・サークルが 16.5%であった。出身大学・短大の応援歌や校歌などを歌える卒業生は 27.1%で、出身校の運動部の試合の応援経験は 24.0%、運動部の活躍を期待している人は 41.5%であった。自由記述回答では、学生時代の体育スポーツに対して賛否両方の意見があった。

研究報告 7

大学における体育授業研究の動向と今後の課題

—論文誌「大学体育スポーツ学研究（第 17 号まで）」のレビューに基づいて—

○西田順一（近畿大学）

わが国には、体育・スポーツに関する様々な事象を科学的に究明する学術団体がいくつも存在し、その各団体は研究成果の公表にあたり定期的に学術雑誌を公刊している。大学における体育授業を主題とした学術論文は、「体育学研究」をはじめ、様々な学術雑誌に掲載されている。とりわけ、近年、「大学体育スポーツ学研究」は、大学体育、大学スポーツの優れた研究知見を集積する学術雑誌へと着実に発展を遂げている。本発表では、刊行された「大学体育スポーツ学研究（大学体育学）」のレビューを実施し、大学体育授業を主題とした研究の動向を整理し、今後の課題を提起することを目的とした。具体的には、第 1 号から第 17 号までの「大学体育スポーツ学研究」の掲載論文を対象として論文数、対象者数、調査方法、そして分析方法を検討した。結果の一部として、対象者数では「中～大サンプル研究」がほとんどを占め、「小サンプル研究」「ビックデータ研究」は僅かであった。また、他領域の研究成果を参考に今後、大学体育授業研究にて必要となる研究方法について言及する。先生方との議論を通じ、大学体育授業研究のクオリティ向上にささやかに貢献できれば幸いである。

基 調 講 演

2 月 28 日（金）10:00～12:00

【Q 棟 202 教室】

講演とアクティブラーニング

テーマ

「教育工学と大学体育教員の力量形成」

演者およびファシリテーター：西原康行（新潟医療福祉大学）

教育工学と大学体育教員の力量形成

西原康行（新潟医療福祉大学）

キーワード：大学体育教員，力量形成，教育工学，教師教育

はじめに

近年の教師教育の研究と実践の基盤をなしている教師像は「多元的・持続的に省察を繰り返す教師」と総称されている。これはショーンによる「反省的实践家」という概念が教育界で市民権を得ているように、ある種の実践家たちが不確実な状況にあって「行為の中の省察」を繰り返していることを概念化している。特に、体育は教科書といった拠り所が無く、座席がない自由かつ広い空間で身体活動によって学びを促すため、私たち体育教師は、まさに不確実かつ予測不可能な授業環境の中で省察しながら授業を行なう実践家である。しかしながら、このような枠組みで大学体育教員は日々の教育実践を行なっているのか、あるいは、研究を積み重ねてきているのかというと必ずしも充分とは言えない。そこで、本講演では、教育工学における教師教育研究の知見から一部の研究を紹介するとともに、アクティブラーニング方式で、ある大学体育の授業を再現認知してみたい。

教育工学における教師教育

教育工学における教師教育は、5つのアプローチで進められている。1つ目は「環境設定アプローチ」であり、模擬授業にICTなどを使って高度化したり、ワークショップ型の教員研修をどう進めていくかといったアプローチである。2つ目は「対人関係アプローチ」であり、教師の力量形成を認知科学的に探ったり、コーチングをいかに実践するかといったアプローチである。3つ目は「フィールドアプローチ」であり、

教育実習などのトレーニングをICTや学習科学、認知科学でどのようにアプローチするかということである。4つ目は「制度的アプローチ」であり、教師教育のトレーニング制度を明らかにすることである。5つ目は「文化的アプローチ」であり、文化として授業研究をどのようにとらえるのか、あるいは自主的研究サークルのあり方などにアプローチしている。以上、5つのアプローチから、当日は対人関係アプローチの教師の力量を認知科学的に探る試みと、環境設定アプローチの教員研修について体现することとする。

大学体育教員の力量形成

前述した通り、体育教師は、教科書といった拠り所が無く、座席がない自由かつ広い空間で身体活動によって学生の学びを促すため、即時的な働きかけやタイミングが重要となる。さらにこの働きかけは、一定の解のあるものではなく（課題解決手続きが一定ではない）、状況認知しながら解の無い解決方法を模索しなければいけない。つまり、体育教師の仕事は、図1の左上の創造性技能領域に位置付けられる。では、この創造性技能領域に位置付けられる体育教師の力量は、どういったトレーニングによって高めることができるのであろうか。特に集合研修などで知識を習得すること（一定の解を修得すること）とは別の授業時におけるより実践的な力量（暗黙知）を高めることが必要となる。1つは「行為の中の省察」として教育工学で実践されている「オンゴーイング法」である。この方法は、授

業を行なっているライブの中で気づいたことを即時的に言語化して省察する方法である。2 つ目は「再現認知法」あるいは「ストップモーション法」といった授業時の映像などを後に見ながら認知して気づきを言語化する方法である。詳細は当日紹介するが、オンゴーイング法は熟達教師の力量形成に効果があり、再現認知法やストップモーション法は初心者教師の気づきや学びを促すことが明らかとなっている。さらに昨今は VR（バーチャルリアリティ）技術の発展により、授業空間のその場に立っているような臨場感を再現できるため、教師の学びを促す効果は高いと考えられる。以上の

実践事例について当日は紹介するとともに、このような実践をどのように研究としてデザインしていくのかについてもディスカッションしたい。

今後の課題

1. ICT 活用の汎用性
2. 閉ざされた風土の開放性
互いに学び、自らが学び、成長する風土の醸成
3. 法則化に陥らない個々の教員の力量や裁量による授業の保障
4. 教育工学における環境設定アプローチの教員研修の進め方

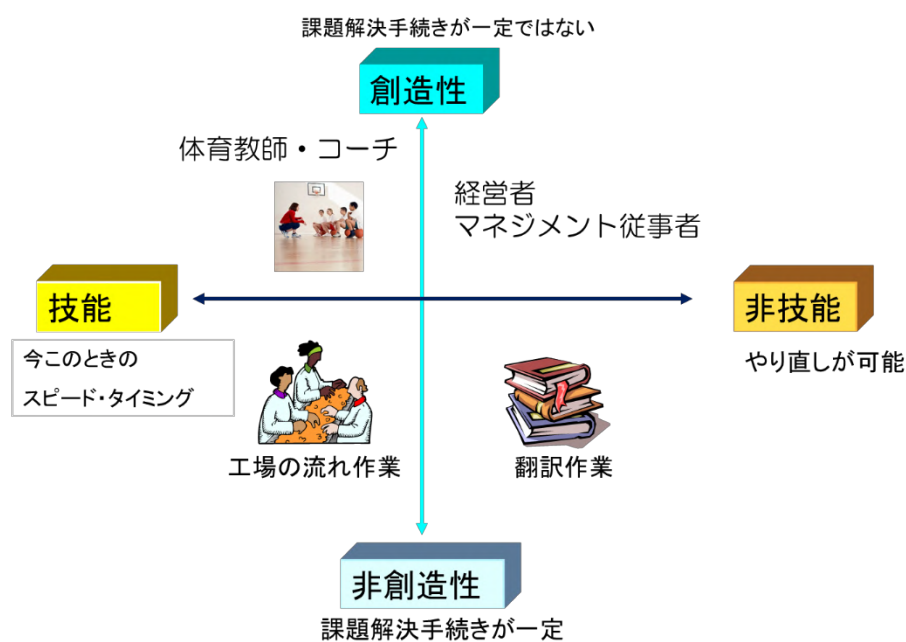


図1 創造性技能領域の仕事の位置づけ

参考文献

- 西原康行，高橋一栄他（2007）大学体育教員の教授力量に関する研究：再現認知による初心者教員と習熟教員の比較．大学体育学 4：3-14.
- 西原康行，生田孝至（2010）再現認知とオンゴーイングによる体育教師の力量把握方法の検討：私自身を対象化したバドミントン授業ゲーム時の認知．体育学研究 55：169-173.
- 西原康行，生田孝至（2013）教員による授業実践の省察のためのオンゴーイング法と再現認知法の効果：大学の専門教育におけるサッカー授業のゲーム場面を対象として．スポーツ教育学研究 33（1）：27-39.

大学体育授業事例ワークショップ

2 月 28 日（金） 13:10～15:00

【Q 棟 202 教室】

13:10～13:55

WS1： 医療福祉系大学教養体育の実践事例

《話題提供者》佐藤敏郎（新潟医療福祉大学）

【H 棟第 1 体育館】

14:00～15:00

WS2： 車いすバスケットボール体験

《コーディネーター》市川浩／武田丈太郎（新潟医療福祉大学）

<WS 1> 医療福祉系大学教養体育の実践事例

話題提供者：佐藤敏郎（新潟医療福祉大学）

新潟医療福祉大学は、2001年に開校され現在では6学部13学科の保健、医療、福祉、スポーツ系の総合大学で約4,200名の大学である。そこで開講されている教養体育は「教養スポーツ」として基礎教養科目群に属し、1年次必修科目の「スポーツ・健康」と2年次選択科目の「スポーツ・実践」で構成され、本学の建学の精神「優れたQOLサポーターの育成」には必要不可欠な科目として位置づけられている。2014年度からにカリキュラムでは、「運動・スポーツを通してQOLを支える優れた人材を育成する」ことを基本理念として、「スポーツ・健康」では、①少人数開講、②健康科学に関する講義、③体組成・体力を測定、④トレーニングセンターの利用、⑤実技種目はアダプテッドスポーツとして車イスバスケットボール、スポーツ・レクリエーションとしてソフトバレーボールを実施し、より優れた保健・医療・福祉・スポーツ分野の専門職養成に寄与することを目的としている。本ワークショップでは、これら実践事例を報告する。

＜WS 2＞ 車いすバスケットボール体験

コーディネーター：市川浩／武田丈太郎（新潟医療福祉大学）

授業デモンストレーション実践者：高田大輔（新潟医療福祉大学）

新潟医療福祉大学では、保健・医療・福祉・スポーツ分野の専門職養成系の総合大学としての特色を生かすため、1年次必修科目の「スポーツ・健康」において、アダプテッドスポーツとして車イスバスケットボールを、スポーツ・レクリエーションとしてソフトバレーボールを授業に取り入れている。これらのスポーツ活動は、保健・医療・福祉・スポーツ分野の専門職に就く本学の学生が、専門職として必要とされる体力を養えるようになるだけでなく、運動・スポーツの文化的価値を認識できるようになるために大切である。特に、これまで馴染みのない車イスバスケットボールの実践を通して、アダプテッドスポーツへの関心を高めるとともに、優れたQOLサポーターとして社会で活躍するためには、障害者や高齢者等の年齢、性別、趣向等が異なる人たちと、その人たちを取り巻く環境への理解を深めていくことも重要になる。本ワークショップでは、「スポーツ・健康」の車イスバスケットボールの授業展開を報告するとともに、実際に車椅子の基本操作や簡単なゲームを体験してもらう。

「大学体育スポーツ学研究」投稿規定

「大学体育スポーツ学研究」投稿規定

1. **本誌の名称：** 本誌の名称を、「大学体育スポーツ学研究 (Japanese Journal of Physical Education and Sport for Higher Education)」とする。本誌は、公益社団法人※1全国大学体育連合(以下「この法人」という)が2003年～2018年に刊行した「大学体育学(第1号～第15号)」を引き継ぐものである。

※1:2011年12月までは社団法人全国大学体育連合。

2. **本誌の目的：** 本誌は、高等教育機関で行われる体育およびスポーツ(以下「大学体育スポーツ」という)における教育活動の発展を目的に、この法人が発行する学術雑誌である。競技力向上に関する基礎科学的な研究は、本誌の範疇に含まれない。

3. **投稿資格：** 本誌には、この法人の会員と非会員を問わず、論文を投稿することができる。ただし、投稿料および掲載料については、20項に定めるとおりとする。本誌編集委員会(以下「本委員会」という)は、論文投稿を依頼することができる。

4. **投稿可能な原稿：** 投稿論文は完結した未発表のものであり、他誌へ投稿中でないものに限る。ただし、学会発表抄録や科研費等の研究報告書の内容を充実させた論文、各種研究助成金の交付を受けた研究をまとめた論文、発表済みの結果であっても新たな観点から再考察した論文は、投稿することができる。

5. **投稿論文の種類：** 表1のとおりとする。

表1 投稿論文の種類, 内容, 制限頁数

種 類	内 容	制限頁数※2
総 説 Review	大学体育スポーツに関する 特定 の内容や主題について、関連 文献 や資料に基づいて総括的に論評した論文。	12頁
原 著 Original Research	大学体育スポーツの発展に寄与しうる研究論文で、高い 独創性 と学術性を備えたもの。	10頁
研究ノート Research Note	原著に 求められる独創性 と学術性の水準に満たないものの、大学体育スポーツの発展に寄与しうる知見や取組等をまとめた報告や資料。	10頁
フォーラム報告 Forum Report	大学体育スポーツ研究フォーラムで発表した内容(一般発表, ラウンドテーブル, ワークショップ, 特別講演 など)の抄録。	1頁
その他 Miscellaneous	編集委員会からの依頼原稿や、他国の言語で掲載された論文の二次出版論文など。	特に定めない

※2：図表等を含めた刷り上がり頁数（文字のみの場合の1頁は約2,300字）

6. **原稿の書式：** 原稿は、図表も含めて1つのWordファイルにまとめたものとそのPDFファイルの両方で提出することとする。書式はA4版縦置き・横書きで全角40字×30行、余白は上下左右35mm、フォントは明朝体10.5ポイント、英数字はすべて半角とする。表紙、抄録、本文までの通し頁番号を各頁のヘッダ中央部に、各頁にも1から始まる行番号を左余白に、それぞれ付すものとする。

7. **原稿の使用言語：** 投稿原稿における使用言語は、日本語または英語とする。

8. **原稿の構成：** 表2のとおりとする。

表2 投稿原稿の構成と順序

項目	内容
表紙	表題
	ランニングタイトル
	論文の種類
	図表の数
	文字数
抄録とキーワード	
本文	
	緒言
	方法
	結果
	考察
	結論
付記、謝辞	
文献	
注	
図表	

9. **抄録：** 和文論文には英文抄録を、英文論文には日本語抄録をつける。抄録はネイティブ・スピーカーのチェックを受けたものとする。

10. **文献リストおよび本文中での文献記載：** 文献リストは、著者名のアルファベット順に並べ、本文の後に一括する。雑誌名は和洋ともに略記しない。文献リストおよび本文中の文献記載方法は、一般社団法人日本体育学会発行の「体育学研究」投稿の手引き(最新版)を参照する。

11. **研究参加者の取り扱い：** 人を対象とする研究遂行に際して、研究対象者の人権尊重や社会的影響等について配慮した点を論文中に明記する。研究倫理については、一般社団法人日本体育学会研究倫理綱領(最新版)を参照する。

12. **投稿原稿返却の例：** 以上2～11に従わない原稿(本誌の目的に沿わないもの、書式に著しい不備のあるもの)や水準の著しく低い原稿については、本委員会の判断により、審査を行わない場合がある。

13. **投稿原稿の提出方法：** 原稿は、この法人の事務局(info@daitairen.or.jp)宛てに、件名を【大学体育スポーツ学研究への投稿論文】としたEメールの添付書類として投稿する。その際、以下8項目【①著者名(著者全員)、②所属機関名(著者全員)、③代表著者の氏名・電話番号・e-mailアドレス、④表題、

⑤ランニングタイトル, ⑥論文の種類, ⑦和文抄録, ⑧和文キーワード】をEメール本文として同時に送信する。

14. **論文投稿の締切日：** 論文投稿は随時行えるものとする。投稿後、審査を経て論文掲載可（受理）となるまでは、通常、最低 3ヶ月を要する。
15. **再提出の期限：** 本委員会より訂正を求められた投稿原稿の提出期限は、訂正通知日から28日以内とする。また、それを超えた場合は新規投稿原稿として審査を行う。
16. **投稿論文の採否：** 投稿論文の採否, 加除訂正の要求, 校正(初校は著者)などは本誌編集委員会(以下「本委員会」という)が行い、著者へ連絡する。
17. **論文受理証明書の発行：** 本委員会により掲載承認された受理論文については、著者の希望により論文受理証明書の発行を行う。
18. **論文公刊の時期：** 1月末までに掲載承認された受理論文は、同年3月中旬にこの法人のホームページ上でPDFファイルとして公開される。
19. **投稿料および掲載料：** 著者全員がこの法人の会員の場合は、投稿料・掲載料ともに無料とする。著者に非会員が含まれる場合は論文1編につき1万円の投稿料を、掲載料については刷り上がり1頁あたり3千円を、投稿者が負担する。表1に示す制限頁数超過の場合は、会員・非会員を問わず、1頁につき3千円を投稿者が負担する。なお、本誌では、会員校の大学院生を会員と同様の扱いとする。
20. **論文の著作権：** 本誌に掲載された論文の著作権の一切(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は、この法人に帰属または譲渡されるものとする。ただし、論文の内容に関する責任は当該論文の著者が負う。
21. **本規定の改廃：** 常務理事会にて行う。

附 則

本規定は、平成15年 6月14日より適用する。
本規定は、平成18年 4月 1日より適用する。
本規定は、平成20年 9月19日より適用する。
本規定は、平成24年 2月 6日より適用する。
本規定は、平成25年 7月26日より適用する。
本規定は、平成27年 5月29日より適用する。
本規定は、平成29年 2月21日より適用する。
本規定は、平成30年 5月18日より適用する。
本規定は、平成31年 2月 7日より適用する。

第8回大学体育スポーツ研究フォーラム
発表プログラム・抄録集

2020（令和2）年2月20日発行

発行：公益社団法人全国大学体育連合（JAUPES）

編集： 実行委員長 佐藤敏郎
抄録集担当 中山正剛

Printed in Japan